

「思いに寄り添うということ」

慢性期実習で私が受け持ったのは、交通事故に遭い頸髄損傷となった A 氏 60 代男性であった。両上下肢不全麻痺が残り、呼吸もままならない。初日の挨拶で「今日から 2 週間よろしくお願いします。」と話しかけた。何本もの管に繋がったベッド上の A 氏は、睨みつけるように天井一点をじっと見つめ、返答をしてくれることはなかった。気難しい患者さんにあたってしまったな、これが私の正直な感情だった。口も聞いてくれない A 氏にどのように対応して良いのか考え抜いても分からず、先生に助言をもらいに行った。「A さんの立場に立って考えてみた？」先生の一言で、私は A 氏を“頸髄損傷の患者さん”としか見ていなかった事に気付いた。“一人の人間としての A 氏”と向き合った時、見えてくるものは違った。

A 氏の表情からは、事故の日の後悔、誇りであった料理人を諦めなければならない悔しさ、大切な家族への思いなど、ぶつけようのない多くの気持ちが伝わってくる。A 氏の立場に立って考えれば考えるほど心が痛んだ。そして同時に、生きる希望は与えられなかったとしても、思いのはけ口にだけでもなれたら、と強く思った。

翌日から、A 氏の「あのまま死んだ方がよかった。」「どうしたら死ねるか毎晩考える。」など、悲観的な言葉に返答は出来なかったが、目をしっかり見て耳を傾けた。また、A 氏から返答がなくても、傍に座り自分から色んな話をした。「感覚がないのに意味ないだろ」と呆れて言う A 氏に、毎日温かいタオルで、心を込めて冷え切った四肢を拭った。

2 週目には、酸素ボンベとリクライニング車椅子を用意し、廊下の窓に広がる景色を一緒に見に行った。A 氏は「なかなかの景色や。」と眩しそうに窓をじっと眺めた。初めて見る柔らかい表情だった。

それから少しずつ、A 氏との距離が縮まってきているような気がした。そして毎朝 A 氏のもとに行くのが楽しみの一つとなり、毎晩必死に眠気と闘いながら書き上げる実習記録も苦にならなかった。

実習最終日、一生懸命作成したスケジュール表を抱え、「これ、部屋に貼らせてください。」とお願した。A 氏は「お前が作ったんか。寝とっても見えるところに貼ってくれ。」と、私の目をしっかり見て返答してくれた。張り終えた時の、「リハビリがんばるわ。ありがとな。」という前向きな一言に、そして何より優しく微笑む A 氏の表情に、涙が溢れてきたことを今でも覚えている。

看護師は、医者のように病気を直接治すことはできない。しかし、患者さんに長く寄り添い、思いに気付き生きる過程を支えていくことができる。患者さんを思う気持ちはいつか必ず伝わり、それが患者さんの安心、生きる意欲に変わっていくものだ信じている。

「患者さんの気持ちに寄り添う」、私は実習で学んだこのことを決して忘れず、看護師になっても患者さん一人ひとりの気持ちに寄り添い、優しく支えていきたい。